

45th Anniversary Special Essay

私たちの生き方に欠かせない哲学

最終回

新時代のエレガンスとは？

時代とともに変容しながらも、私たちの生き方の大きな指針となっているのが
創刊以来、25ansが追究してきた「エレガンス」という哲学。

45周年を記念し、豪華執筆陣が「新時代のエレガンス」をひもときます。

最終回は服飾史から日本の伝統工芸までに精通するラグジュアリー文化の専門家、中野香織さんが登場！

エレガンスは、倫理である



服飾史家

中野香織さん

KAORI NAKANO

PROFILE ラグジュアリー領域を中心に著述・講演・教育・企業アドバイザーに携わる。英ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授、昭和女子大学客員教授を歴任。最新刊は100名のインベーターからファッション史を読み解く「インベーター」で読むアパレル全史 増補改訂版（日本実業出版社）。YouTubeでのスーツ解説も好評。www.kaori-nakano.com

「エレガンス」には、決定的な定義がありません。人としての品格と結びつく言葉でもあるので、時代や文化によって意味も知覚も異なってきます。

たとえば、西洋の宮廷文化において「エレガンス」は格式・権威の演出でした。しかし、現代では個人の美意識や知性との関わりが大きくなっています。

新時代のエレガンスを考えると、手がかりとなるのが、デザイナーのココ・シャネルやイヴ・サンローラン、そして米「ヴォーグ」の編集長だったダイアナ・ヴーリランドが遺した「エレガンスとは拒絶である」という言葉でしょう。流行や多数派、外部の期待に従うことを拒み、最後に自分の判断を選び取る。その拒絶と選択の力こそ、現代において最も切実に求められるエレガンスの条件です。

その意味でのエレガンスを体現する女性の例を、リアルとフィクションから挙げてみましょう。

まずはミウッチャ・プラダ。バックステージでの写真が有名です。タバコを片手にしゃがみ、決して「お行儀よい」振る舞いではありません。しかし、姿勢は澄んだ集中力に満ちています。細びたり、気取ったりするのではなく、流行や主流の価値観を拒んで自分の美意識に静かに従う。こうした態度が恰良いに「貫いた秩序をもたらす」、多くの人々の目にエレガントと映るのです。表層の上品さではなく、本質的な判断のセンスのよさが、乱れた所作さえ美しく見せるという例です。

次にティルダ・スウィントン。高身長でアンドロジナスな存在感を放つ俳優です。既成の枠組みに適合することを拒絶し、性別も超越し、美

Column 1

記憶に残る「25ans」の1ページ

これまで、連載、特集問わず、さまざまな記事に携わってくださった中野さん。「テーマの柱は大きく分けて2つ。ロイヤルとラグジュアリー。ロイヤル関連では連載「ダイアナ紀」という伝説」(左、2007年8月号〜12月号)や、エリザベス女王はじめ歴代英国ロイヤルメンバーの物語、キャサリン妃のファッション記事など、これらの記事はその後の著書、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)の土台となりました。また、ラグジュアリー関連では、「ラグジュアリークエスト 贅沢の探求」(2008年1月号〜12月号)や「リュクシーなモード」(右、2009年1月号〜12月号)連載、キャリアの早い時期にラグジュアリーについて考える機会を与えられたことで、その後の共著「新・ラグジュアリー 文化が生み出す経済10の講義」(クロスメディア・パブリッシング)につながる基礎体力が養われました。文字通り、25ansには「育てていただいた」という思いが強くあります。

術家として自らの可能性を押し広げる挑戦を選んできました。舞台裏でも他者への敬意を保ち、孤高でありながら凛とした謙虚さが周囲の空気を整えます。そんな態度の美学を貫く彼女は、華やかな場でもノーマイクに白シャツという装いであっても、エレガントと称されます。さらにもうひとり、映画「ココ・アヴァン・シヤネル」での主人公。演じるのはオドレイ・トトゥ。羽根やレースに飾られた女性の輪から離れ、自作のシヤネルな服でひとり佇む主人公シヤネルが「君はエレガントだ」と称えられる場面があります。そこには、社会的な規範を拒み、自身の選択を引き受ける孤獨な意志への賛辞が込められています。

男性にもエレガンスは宿ります。9月に他界した巨匠、ジョルジョ・アルマーニがその規範です。2019年の来日時における記者会見で、アルマーニは、60分間立ったまま記者の質問に丁寧に答えていました。若いスタッフが疲れて座り込むなか、84歳のアルマーニは背筋を伸ばし、記者に敬意を表して立ち続けていたのです。マエストロの姿は、エレガンスは美学というよりむしろ倫理である、と教えてくれました。彼が遺した言葉「エレガンスとは、目立つことではなく記憶に残ること」をまさに体現した姿でした。

新時代のエレガンスには、自分と世界への敬意に基づき、何を手放し、何を運び取るかを自覚的に編集する力が必要です。自分であることを運び抜き、世に向き合う態度を小さな芸術に昇華させた結果、周囲により影響を与えていくこと。この主體的な編集こそ、いま最も求められるエレガンスのかたちであり、私たちが真にすべき倫理でもあるでしょう。

私と25ansとのおつきあいは、創刊時から始まります。大学生になつたばかりのころ、「赤文字系」雑誌が全盛でしたが、25ansだけが別格の異端として時を超える気品を追求していました。一歩も欠かさず読み続けていた熱心な読者は、やがて愛読者にして書き手となり、ついには15周年を祝う巻頭連載のアンカーを担わせていただいていることに、恩義とともに深い感慨を覚えています。

いま、こうして新世代の読者の方とつながり、エレガンスの哲学を共有できるとしたら、これほど嬉しいことはありません。

Column 2

日常で見つけた「身近なエレガンス」

ファッションのみならず、幅広い領域でラグジュアリーやエレガンスを考察している中野さんのお気に入りのアドレスは？「パレスホテル東京のおもてなしの全てにエレガンスを感じます。施設・インテリアにおいては、トレンドにはのらないタイムレスで合理的な空間設計、洗練と温かみのある家具が並び、季節の装花やアメニティにいたるまで一貫した上質なテイストで安心感を与えてくれます。何よりも渡部 紀支配人を筆頭にスタッフがエレガントです。マニュアル対応をせず、目の前のゲストに向き合い、押しつけがましくなく、スマートで期待以上に的確な対応をしてくれます。過剰なサービスや演出は排し、個々のスタッフが主体的に判断してゲストに最もふさわしい行動を選び取ってサービスしています。エレガンスのシャワーを五感で浴びることができるホテルとして、時々その空間に迷いに行きます」

